

# 清末小説から 93

2009.4.1

- 「老残遊記」執筆経過の謎 1 .....樽本照雄 1  
《還珠》の原作 .....渡辺浩司12  
林譯小説《巴黎茶花女遺事》的訛傳 .....蘇 建新18  
晩清小説作者扫描(拾捌) .....武 禧20  
清末小説から11、17、20、22

『林紓研究論集』を刊行しました。『林紓冤罪事件簿』その2ということになります。中国で林紓の名誉回復が行なわれるかどうか。興味深いところですが、私は期待していません...罍

清末小説研究会 日本〒520-0806 滋賀県大津市打出浜 8 番4-202 樽本照雄方

## 「老残遊記」執筆経過の謎 1 書簡集『滄榕書札』に見る

樽 本 照 雄

劉鉄雲「老残遊記」の執筆経過、あるいは刊行情況について記述するばあい、いくつかの水準にわけることができる。

基本的な説明はこうだ。「老残遊記」は初集20回、二集9回が公表された(本稿は二集、回を使用する)。それらとは別に未公表の外編残稿がある。

もうすこし詳しくいうところなる。最初は雑誌『繡像小説』(1903)に連載されたが、中断した。その後、『天津日日新聞』が「老残遊記」初集20回と二集9回を掲載した。

普通は、以上の水準でとどまる。考えようによっては、これで十分に説明したことになるだろう。執筆の経過を含めて、その状況をより深く掘り下げて記述することは可能だ。だが、実行されることはない。劉鉄雲研究あるいは「老残遊記」の作品論とは無関係だ、と判断されるからである。

つぎのことを指摘しなければならない。その水準で記述を停止すれば、より重要な事実が見えなくなる。

『繡像小説』での連載はなぜ中断したのか。説明がないから1900年代当時の読者にはその理由がわからない。一方で、

初集20回の版本が流布しはじめる。注意深い読者は、本文の一部が『繡像小説』掲載のものと20回単行本とは異なっていることに気づく。つまり、2種類の本文が存在している。どちらが正しいのか、判断する材料は提供されていない。雑誌初出と単行本の本文が違えば、作品論どころではなくなる。

それから約30年が経過した。著者劉鉄雲の息子大紳が登場する。彼は、「老残遊記について〔關於老残遊記〕」(1939)において連載が中断した理由をはじめて明らかにした。

劉大紳の証言を私なりにまとめるとつぎのようになる。

事件は、『繡像小説』連載中におこった。「老残遊記」原稿の第11回が編集者によって没書にされたのだ。劉鉄雲は、執筆を中断する。のちに劉が続作することにしたのは、事情を知った友人に勧められたからである。『天津日日新聞』にあらためて掲載して初集20回が成った。つづけて二集9回を同紙上に連載して途中で終了する。

以上の説明で一応の理解は得られるだろう。

だが、事実をもう少し追求すると新しい展開になる。説明できない複数の事柄が別に出現する。それらが相互にからまっていることも明るみにでる。一般的な水準でとどまっていれば、そのことに気づかない。

たとえば、劉大紳が説明しなかった、あるいは存在さえ知らなかった事実がある。盗用問題だ。

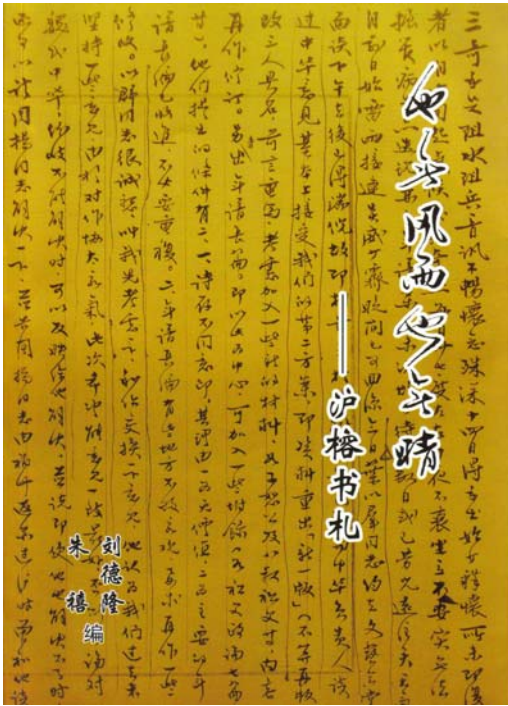
没書にされた「老残遊記」の原稿第11回が、同じ『繡像小説』に連載中の「文明小史」第59回に取り込まれた。「文明小史」の著者は李伯元だ。『繡像小説』の編集責任者でもある(この主編者についてもはるか後の80年代に疑義が提出された)。李伯元が劉鉄雲の没原稿を無断使用した。別のことばでいえば、盗用したのである。こうなると「文明小史」という作品論に直接関係してくる。もっといえば、著者李伯元の死去という事実がこれにからむ。また、『繡像小説』そのものの発行が遅延していた事実と結びついて、状況はさらに複雑化する。新しい事実の出現により従来の認識を修正する必要が生じる。だからこそ研究は発展する。

ただし、この複雑な問題を把握している研究者は、現在それほど多くはない。『繡像小説』という小説専門雑誌を研究するのは、出版史研究の分野であって文学研究とは無関係だ、という考えが存在しているのか。それぞれの作家論、作品論とかかかわっている、と指摘しても理解しにくいらしい。

「老残遊記」の執筆経過にひきもどす。

劉厚沢が直面した謎こそ、この「老残遊記」執筆経過問題であった。60年代はじめのことだ。

劉厚沢(1915-1970)は、劉鉄雲の孫だから親族として利用することのできる材料資料を特別に所蔵していた。そこが一般の研究者とは違う。彼が見ることができたのは劉鉄雲の日記である。日記に記載された「老残遊記」の執筆情況が、雑誌、新聞の連載時期と一致しない。利用



『也無風雨也無晴 滬榕書札』

研究会のホームページで簡単に紹介した。該書のおおよそを理解してもらうために引用する。

2008.12.1

『滬榕書札』は、劉鉄雲の孫に当る人物劉厚沢の書簡集です。

1958-1966年の9年間に劉厚沢（上海＝滬）から兄劉蕙孫（福州＝榕）へ当てた手紙103通を収録しています。

人間関係を簡単に説明しましょう。

劉鉄雲は、いうまでもなく「老残遊記」の著者としても有名です。彼の息子のひとりが劉大紳です。「關於老残遊記」（1939）を発表し貴重な証言を残しました。劉蕙孫と劉厚沢の兄弟は、その劉大紳の息子たちという関係になります。

書名から、劉蕙孫と劉厚沢の往復書簡集にも思われます。しかし、実物を見るとそうではありません。

「文化大革命」にあって劉蕙孫は拘束され、手元にあった劉厚沢からの手紙も没収された。のちに返還されたもののなかに手紙も含まれていたということらしい。

ところが、劉蕙孫からの手紙は没収されたまま行方不明になった。ということで、残された劉厚沢書簡を親族が協力して整理刊行したというのがいきさつです。

「反右派闘争」「大躍進」の時代からはじまって、劉厚沢の仕事、研究（太谷学派、劉鉄雲研究を含む）、あるいは親戚の消息がつづられてお

できる資料があったから知識が増加して、かえって説明できない事柄に遭遇した。これが、本稿の主題である「執筆経過の謎」だ。

劉鉄雲「老残遊記」の執筆経過を、あらためて考える契機になった最近の出版物から紹介しよう。

### 『滬榕書札』という書簡集

劉德隆、朱禧編『也無風雨也無晴 滬榕書札』（私家版 刊年不記[2008.11]）が刊行された（以下、書名を『滬榕書札』と称する）。

なお、あらかじめお断わりしておく。本稿はその性質上、樽本「『劉鶚集』はよろしい」（『清末小説から』第91号2008.10.1）ほかと内容が重複する部分がある。

私は、『滬榕書札』について清末小説

り興味深いことです。人名には「説明」がつけられていて、親切だといえましょう。

「老残遊記」に関連しての話題が多く含まれています。読み解けば、新しいことが出てくる可能性もある。

該書は、冒頭に写真8頁、凡例、劉徳隅「前言」、目録、本文、附録(1 劉厚滋「丹徒劉審言先生墓表記」、2 劉徳平「読信雑憶」、3 劉徳枢「吾家家世」、4 劉徳隆「關於《老残遊記資料》」、5 劉徳隆「《也無風雨也無晴 滄榕書札》保存整理始末」、6 劉徳平「亦談書名“也無風雨也無晴” 校対感言」という構成になっています。

B5判、314頁。私家版のためか奥付はありません。

手紙には、『老残遊記資料』(出版が実現したのは北京・中華書局1962.4。奥付の記載による。以下、『資料』と略称)の編集について、多くの説明がある。もちろん、そればかりではない。劉鉄雲と太谷学派関係についての記述も大いに注目される。

書名に使われた「也無風雨也無晴」は、蘇軾(東坡)の「定風波」からとったもの。雨風だろうが、晴れだろうがかまわない。情熱を注いで執筆編集した『資料』が、刊行されてみれば他人の功績になっている。書簡集を読んだ劉徳隅(劉厚沢の息子)が父親の心情を思いやり、蘇軾のことばに重ねたところからの命名となった。

私の関心が「老残遊記」にあるために、目が自然にその方向にいつてしまう。

書簡をたどりながら、まず資料編集とその刊行について簡単に説明する。

#### 『資料』の編集と刊行

上海に住んでいた劉厚沢は、祖父劉鉄雲と「老残遊記」に關係する資料集の刊行準備をしていた。中国作家協会上海分会(以下、作協)の魏紹昌が窓口であったようだ。劉厚沢は、魏と連絡をとりながら資料を収集整理する。作業の進行状況は、手紙からそのおおよそを読みとることができる。問題が出てくれば、兄劉蕙孫(1909-1996)と相談する。そのくり返した。兄から返書が当然ある。ただし、前述したように劉蕙孫の書簡は失われた。

『資料』の編集計画には紆余曲折があって、作協が示したほぼ最終案は以下のとおり(記号【043-61-04】1961.3.20付。104-106頁)。要旨のみを示す。

『老残遊記 資料本』と『劉鉄雲年譜……初稿』の2冊本

上冊 魏紹昌、劉蕙孫、劉厚沢編輯後3回、外編、前20回の評語、劉大紳「關於<老残遊記>」、蔣逸雪「年譜」、張畢来、胡適らの論文

下冊 劉蕙孫著『年譜』

中華書局発行 下冊の『劉鉄雲年譜』は、劉蕙孫が手を入れる。時間の關係で上冊のみ先行して出版し、

『年譜』(「年譜長編」と称する)はその後の刊行になる。

「後3回」というのは、「老残遊記」二集第7-9回を指す。

二集は『天津日日新聞』に第9回までが掲載され、未完のままに終わっている。その後、存在そのものが忘れられた。複数の出版社がくりかえし刊行したのは、初集20回のみだ。ところが、二集9回分は、天津日日新聞社に勤務していた劉家の親族によって再発見される。1929年だという。1934年、その4回分が雑誌『人間世』第6-14期に掲載されたのだから注目を集めた。翌1935年、同誌の版元である上海・良友図書印刷公司より、小型の単行本が刊行された。雑誌掲載は4回分だったが、それに2回分を加えた合計6回を収録している。

つまり、二集は本来が9回分あったにもかかわらず30年代に第6回までしか公表されなかった。北京・人民文学出版社から刊行された『老残遊記』(1957.10)は、初集20回と二集の6回分を収録している。この二集は、良友図書印刷公司本にもとづく。9回までであるとは説明していない\*1。二集の残り3回分の存在は広くは知られていなかった。『資料』にそれらを収録するのは、刊行物としての大きな特色になる。また、外編については、そのようなものがあると劉大紳は説明した。だが、活字になったことはない。こちらも価値ある新資料である。

「(劉鉄雲)年譜」がふたつ見える。それらは別物だ。蔣逸雪の年譜はすでに公表されており、劉蕙孫は執筆途中である。

蔣逸雪の「年譜」は、40年代に発表された(『揚州師範学院学報』第3期1959.12掲載のものかもしれない)。これを収録する理由は、外部研究者の著作として尊重するためだ(82頁)。その一方で、親族の劉蕙孫が手元に保存する豊富な材料をもとにして新しく書き下ろす。未公開の「劉鉄雲日記」などを含んだ資料を活用して執筆する予定だ。年譜の決定版として万全なものにする計画であろう。ただし、劉蕙孫は以前から原稿執筆に取りかかっていたが、この時点ではまだ書き終えてはいない。執筆途中である。

張畢来論文は、胡適批判につながる「老残遊記」批判で知られている。それをあえて収録するのは研究資料集として平衡をとる意味だとわかる(ただし、結局のところ論文収録はされず簡単な内容紹介が示されただけ)。胡適批判が継続して進行中であるが、彼の論文を採録するのもそういう配慮からだろう(こちらは実現する)。

1961年に劉厚沢は劉鉄雲関係資料の大部分を南京博物院に寄贈した(【047-61-08】)。全部ではない。「劉鉄雲日記」についてはその存在を知らせていない。

『資料』は、その後、上海・中華書局の内部審査を通過した。だが、それでも最終的な決定が下されない。その時期に、従来とは違う別の編集方針が提示されている。奇妙に思える。その編集内容は、つぎのとおり。

上冊に「老残遊記」初集20回、二集6回、最後の3回、外編、自作の序、自作の評語を収録する。こちらは市販する。

下冊は資料で内部発行とし、市販はしない(【051-61-12】142頁)。

そのころ、劉蕙孫「年譜長編」について劉厚沢と魏紹昌が修正作業をつづけていた(142頁)。劉兄弟は上海と福州に離れているから、劉蕙孫の原稿は送られて劉厚沢の手元にある。完成原稿にするためには、検討し修正をほどこさなくてはならない。分量が多いから時間がかかるはずだ。

作協の編集案と中華書局のそれとが、ここに至って異なっていることがわかるだろう。

作協案は、あくまでも研究用資料として刊行することを目的にしている。一方の中華書局案は、それまでバラバラだった『老残遊記』を1本にまとめて出版したいらしい。いわば完本『老残遊記』だ。だから、年譜などの資料は内部発行ですませたい。研究用では、販売するにしても多くの部数は期待できない、という判断があるのだろう。

劉厚沢の手紙を読んでいて、私には理解できないことがある。つまり、もうすぐ刊行する書籍であるにもかかわらず、責任者が不明確なのだ。それが当時の中国出版界の慣習なのか、それとも『資料』に限ってのことなのか、そこがよくわからない。

魏紹昌ははたして作協を代表しているのか、それとも単なる窓口で協力者なのか。それも不明である。魏がいるかと思えば、上海社会科学院の陳夢熊が出てくる(182頁では中華書局の陳夢熊とある)。作協の編集案とは別に出版元の中華書局

からも編集案が提出されたことは述べた。上部のどこかに責任者がいるのだが、それは劉厚沢には知らされていないらしい。

1962年4月8日付の手紙(【063-62-08】175頁)によると、訪ねてきて出版の状況を説明したのは陳夢熊だった。該書が刊行される直前のことだ。陳のことによると、こうなる。

上冊はもうすぐ出版される。蒋逸雪部分に少し訂正があって遅れた。5月中には出る。署名は魏紹昌、劉蕙孫、劉厚沢の3人を予定していたが、「総編」の決定をへて「作協」の名前にした。印刷部数は1千部だ。劉蕙孫の「劉鉄雲年譜」長編は、慎重に検討中である、などなど。劉鉄雲の詩集、日記についても別に出版計画あるいは出版希望があることも説明されている\*2。

蒋逸雪作「劉鉄雲年譜」に修正がほどこされたこと、および編者名の表示変更が伝えられたことに注目する。

劉蕙孫の原稿は「総編室」に急いで送る、とある。「総編室」に編集刊行の責任と権限が与えられているらしい。そうすると、その室長が総責任者になるはずだ。しかし、名前は明らかにされていない。

実際に刊行された『資料』を手にした劉厚沢は、驚いた。作協文学研究室の名前で出ると聞かされていたが(182頁)、魏紹昌ひとりが編集したことになっている。しかも、蒋逸雪の「年譜」には大幅に手が入られているではないか。彼が考えていたのとは違う。

実物の構成、目次などを示すと以下の

ようになる。

魏紹昌編、中華書局上海編輯所編輯  
『老残遊記資料』北京・中華書局

1962.4\*3

(図片) 劉鶚像 / 劉鶚四十六歳像 /  
劉鶚四十九歳像 / 《繡像小説》半月  
刊第九期封面 / 《老残遊記》最早単  
行本里封 / 《老残遊記》第五卷挿図  
/ 《老残遊記》第十二卷挿図 / 《老  
残遊記》外編原稿第一頁 / 《老残遊  
記》外編原稿第七頁

前言……………編者(魏紹昌)\*4

第1輯

《老残遊記》初編自序  
《老残遊記》二編自序  
《老残遊記》初編卷一至卷十七評語  
《老残遊記》二編卷七 - 九  
《老残遊記》外編卷一(残稿)

第2輯

關於《老残遊記》……………劉大紳  
《老残遊記》作者劉鉄雲先生的軼事  
……………劉大鈞  
劉鉄雲先生軼事……………劉大鈞  
良友版《老残遊記》二集跋一  
……………劉大鈞  
良友版《老残遊記》二集跋二  
……………劉鉄孫

第3輯

劉鉄雲軼事……………劉大傑  
庚子聯軍戦役中の《老残遊記》作者  
劉鉄雲……………阿英  
劉鉄雲年譜……………蒋逸雪

附録

亜東版《老残遊記》序……………胡適  
良友版《老残遊記》二集序…林語堂

第1輯と第2輯に線を引いたのには、  
理由がある。劉厚沢が、自分で校正刷り  
を点検したのはこの第1、2輯(『資  
料』1-119頁)だけであった。それ以外は  
見ない、と魏紹昌に告げている。なぜな  
ら、第3輯と「附録」に収録された文章  
は、劉厚沢らが提供したものではないか  
らだ。その校訂は魏紹昌が責任を持つこ  
とになった(182頁)。

確かに、第1輯は「老残遊記」関係だ  
(「老残遊記」二集第7-9回は、『天津日  
日新聞』に掲載された実物ではない。再発  
見されたとき記録のために手書きで複写し  
た原稿だ。兄劉蕙孫にあてた手紙だから、  
両者にとっては周知のこと。わざわざ説明  
する必要がない)。また、第2輯に収録し  
たそれぞれの文章は、すべて劉家の人々  
が書いたもの。それらには劉厚沢自身が  
注釈をつけている\*5。彼が点検するのは  
当然だろう。

胡適と林語堂の文章が特別扱いで「附  
録」に配置されている。「反動文人」だ  
と批判されている人物が書いたものだか  
らだ。60年代とは、そういう時代だった。

できてきた書籍の大きな変更点は、く  
りかえせば編集者の名前が魏紹昌ひとり  
になっていることがひとつ。もうひとつ  
は、蒋逸雪「年譜」が大幅に書き換えら  
れていることだ。劉厚沢は、狐につまま  
れた感じがしただろう。そのふたつの変  
更は、ともに彼が関知しない部分に生じ

ている。阻止しようにも事前に点検していないから、どうしようもない。

蒋逸雪は該書所収「年譜」の末尾に、劉厚滋(蕙孫)の材料によって修改と補充をしたと注記する(『資料』186頁)。蒋逸雪の先行年譜は、劉厚沢から見て内容的には満足のいくものではなかったはずだ。ただ、研究者が書いた客観的な年譜として尊重するために収録を認めた。蒋の記述が不十分である箇所は、劉蕙孫の詳細な年譜長編で補足できる。だから別冊で刊行することに賛成したのだろう。劉鉄雲日記から豊富に引用するのが劉蕙孫原稿の特色になるはずだった。ところが、蒋逸雪がその劉蕙孫原稿にもとづいて勝手に加筆しているのではないか(劉鉄雲日記については、孫引きになる)。だから、従来年譜とは違う比較的詳細な説明になっている。劉厚沢には無断で劉蕙孫原稿を利用させた結果なのだ。

これより以前の1961年10月13日付で劉厚沢は次のように説明している。

蒋逸雪が原稿修正するときの参考に劉蕙孫の「年譜長編」原稿を彼に郵送する考えを作協は示した。しかし、劉厚沢はそれを断わった。それが認められたと彼は兄の劉蕙孫に知らせた(【053-61-14】152頁)。当たり前だろう。特色のある劉蕙孫原稿を蒋逸雪に参照させれば、劉蕙孫原稿の価値は失われるに決まっている。

当事者であれば、ただちに理解するに違いない。「彼ら」は劉厚沢の意向をわざと無視した。そうしたのが、劉蕙孫著の年譜長編は別冊で刊行する意志がない、ということを示している\*6。「彼ら」と

いえば複数だ。作協の人々だが、突きつめれば魏紹昌ひとりになるのだろうか。中華書局も関係しているから、それもはっきりしない。詳細は不明だ。問題解決のために、何回か名前のでてくる作協副主席葉以群、また陶蓋華が動いている。

私が紹介できるのは、ここまでである。

事前に了解していた説明と、実際に出てきた刊行物が異なっている。どうしてそうなったのかは、当事者である劉厚沢自身にもわからない。

その後、中華書局版『資料』の再版が計画され、1962年に関係者間で合意が成った。編集に少し変更をくわえる新一版だという。しかし、50年近くが経過した現在にいたるまで該書の刊行は実現していない。

外国人である私が、以上のいきさつを見てわかるのは、責任の所在が不明確だったということだけだ。

執筆経過、またその謎

劉厚沢は、父大紳が執筆した「關於老残遊記」\*7に注釈をつける作業をつづけていた。それを進めていくといくつかの疑問に突き当たる。「老残遊記」の執筆経過についてのものだ。説明にあたり、今便宜的に番号をふる。

はじめは劉大紳の説明に見える小さな誤記である。

1. 二集は「8回本」と書いているが実は9回が存在する(【019-60-01】43頁)

劉大紳は、二集が『天津日日新聞』に連載されて、全部で14回があると説明し



た(『文苑』11頁)。そこにほどこされた注13を引用する。

註13 当時、書いていたのは確かに第14巻である。亡父は清光緒三十三年(1907)六月ころに漢口へ赴いたが、行くにあたって切り抜いておくよう、また掲載が終わったら余分に数部を新聞社に請求するよう私にいいつけた。また、これ以上続作はしない、と方若に言っておいたとも語った。いわれたとおりに行なったけれども、家の災難をへたため、いろいろ手を尽してさがしたが、すべてを回復することはできず、今わずかに8巻があるだけだ。良友が印刷したのは、いところが切り抜いたのが6巻だけあったため、それで中断したと考えた。(『文苑』12頁)

方若(葉雨)は、劉鉄雲の友人で当時『天津日日新聞』の社長だった。方が勧めて劉鉄雲は「老残遊記」初集を該紙上に連載のうえ完成させた。二集も同紙に連載したというのがいきさつだ。良友とは上海の良友図書印刷公司のこと。二集6回を1935年に刊行した。

この注が二集について説明していることに目をとめてほしい。

劉厚沢は、二集の回数について、次のような注をつけた。

注13でいっている「今わずかに8巻があるだけだ。良友が印刷したのは、いところが切り抜いたのが6巻だ

けあったため、それで中断したと考えた」の8巻は実は9巻である。ここは亡父の誤記である。(『資料』94-95頁)

誤記といっても小さなものだ。劉厚沢がそれを訂正したのは、いい。

つぎに別の問題がでてきた。原稿の執筆と『繡像小説』連載、あるいは『天津日日新聞』の掲載時期についてだ。1960年の段階で、そう明確には把握されてはいないが、劉厚沢は調査の必要を感じている。

2. 商務印書館の『繡像小説』は、「老残遊記」をいつ掲載したのか(【021-60-03】49頁)

劉厚沢は劉鉄雲の親族だが、『繡像小説』を所有しているわけではなかった。

「老残遊記」は、雑誌に連載されていたが中断し、そののち『天津日日新聞』に連載された。しかし、劉厚沢の手元に『繡像小説』の実物はない。

「老残遊記」執筆の経過を追跡するためには、初出雑誌を調査する必要がある。

こうして劉厚沢は、ある問題に遭遇することになる。どう考えても解決できそうにない問題だ。

3. 二集執筆と「劉鉄雲日記」の記載が一致しない(【032-60-14】70-71頁)

劉厚沢は独自に利用することのできる資料を持っていた。だからこそほかの研究者が気づかなかった問題を見つけたとすることができる。直接扱ったのは、劉

蕙孫の「年譜長編」だ。原稿を受け取ったと1960年8月14日付で知らせている。それを劉厚沢は点検しながら自分で考えた。

私の原稿で、頭を悩ませることがひとつあります。作品とその執筆時間の問題です。(劉鉄雲の)「乙巳日記」と対照すると、(二集は)1905年に書いていますが、しかし私の推測とは符合しないし、その他の説明すべてとも合致しません。1905年の冬に書いて、祖父は1909年に逝去しますから、初集、二集、外編〔外集〕はすべて続けて書いたものです。文章の勢い、文章の作り、口調などのいかなる方面においても、まったく筋が通りません。もしあなたの言うように、二編がたしかに14章あるとすれば、「乙巳日記」に記載のあるのが書かれた二編だとするのが合理的です。しかし、「15章」というのはどこから来たのでしょうか。今、この問題を解決するためには、ただひとつの方法は、最初の『繡像小説』を探しだして、それが何時なのかを見ることです。私が今推測しているのは、二集には15章以上があって、14章だけを印刷し、現在9章が存在している可能性だけです。

「私の原稿」というのは、劉厚沢が別に執筆していた論文をさす。『文学遺産』増刊第7輯に掲載を予定していたという。だが、結局のところ掲載されな

った\*8。

二集の第14回については、それが確かにあった、と劉大紳が証言している。そのことを意味する。

劉厚沢は、劉鉄雲「乙巳日記」の記述を根拠にして「老残遊記」執筆の経過について問題を提起した。相談相手の劉蕙孫は、「年譜長編」を書いているから、何が問題なのかを十分に把握している。ただし、上の書簡を見て状況が理解できる読者は少ないだろう。だいいち、「乙巳日記」にどのように記載されているのかここでは明らかにされてはいないからだ。

でてくる単語からおぼろげにわかるのは、二集には第15回があるらしいということだ。それらをまとめて、最後部分の説明になる。劉厚沢の考えをくりかえす。二集は15回以上が書かれてはいたが、新聞に掲載されたのは第14回までだった。そのうちの9回分が現存している。 罫

#### 【注】

- 1) 再版(1982.4)に二集第7-9回を収録する。説明して、劉蕙孫と劉厚沢が『天津日日新聞』から筆写した副本にもとづく、と。『資料』に収録したものにはほかならない。
- 2) これらの刊行物の実現するのは「文化大革命」終結後のことだ。詩集については、『鉄雲詩存』(済南・齊魯書社1980.12)、劉徳威編『余瀛集 劉成忠、劉鶚及其後人詩存』(香港・天馬図書有限公司2001.1)が刊行された。日記は、劉徳隆、朱禧、劉

徳平編『劉鶚及老残遊記資料』(成都・四川人民出版社1985.7)に収録。それらの集大成が劉徳隆整理『劉鶚集』上下冊(長春・吉林文史出版社2007.12)である。

- 3) 魏紹昌と中華書局上海編輯所を連記したのは奥付(該書では前付)にそうあるからだ。だが、扉は魏紹昌だけの名前になっている。それで思い出すことがある。魏紹昌に会ったとき直接指摘があった。北京・中華書局ではない、上海だ、というのだ。私は、該書の記載にもとづいて出版が北京・中華書局だと記述した。私は彼に該当の個所を指さして見せた。そうとしか書きようがないのだが、魏紹昌の認識は違っていったようだ。のちの魏紹昌「魏紹昌自編書目提要」(『文教資料』1997年第5期(総第233期)1997(月日不記)31頁)においても「老残遊記資料 中華書局上海編輯所1962年4月出版」と自分で書いている。北京の中華書局は名目上のことにすぎない。魏の意識ではそういうことだろう。編集も印刷も上海で行なったのが事実であるらしい。
- 4) 署名は「編者」とだけあって名前は明示されてはいない。しかし、扉も奥付も編者は魏紹昌だ。この前言を書いた「編者」は魏となる。
- 5) 魏紹昌が私に直接話したことがある。『資料』の劉厚沢注釈は、厚沢の名前ではあるが実質は魏自身が書いたものだ、と。私はこのことを劉家の親族に確かめた。その人は言下に否

定した。劉厚沢の名前があるのだから厚沢が書いたのだ。その人はいいながらとても不愉快そうだったのをおぼえている。本稿注11を参照のこと。

- 6) 劉蕙孫の年譜長編は、後日といっても約20年後に、別の形で刊行された。劉蕙孫『劉鉄雲年譜長編』(済南・齊魯書社1982.8)がそれだ。
- 7) 署名は紳。『文苑』第1輯1939.4.15。のち『宇宙風乙刊』第20-24期1940.1.15-5.1に再掲載。また、魏紹昌編『老残遊記資料』北京・中華書局1962.4、劉徳隆、朱禧、劉徳平編『劉鶚及老残遊記資料』などに収録される。
- 8) 劉厚沢「劉鶚与《老残遊記》」は『劉鶚及老残遊記資料』に収録された。

『清末小説から』第92号 2009.1.1  
瀬戸宏報告を評する 「林紓のシェイクスピア観 林紓は冤罪か」について ..... 樽本照雄  
《滑稽小説 紙牌》の原作..... 渡辺浩司  
晩清小説作者掃描(17) ..... 武 禧  
商務印書館創業者の姻戚関係図(補遺) ..... 樽本照雄

## 《 還 珠 》 の 原 作

渡 辺 浩 司

1

《小説月報》第九卷第二号(商務印書館,1918年2月25日\*1)に《還珠》なる短篇小説が掲載された。書名の下には「毅漢」と書かれているだけで、一見、創作のように見える。『新編増補清末民初小説目録』(樽本照雄編,齊魯書社,2002年4月)も創作と見なしている(284頁,h1291)。

しかし、実はこの作品は翻訳なのである。原作は、Melville Davisson Post 『Lord Winton's Adventure』(初出? 『Hearst's Magazine』掲載1917年6月未見 『The Strand Magazine』Vol.54-No.322掲載1917年10月 短篇集 『The Mystery at the Blue Villa』(D. Appleton and Company,1919年未見)所収)である\*2。

Melville Davisson Post は、1869年生まれ、1930年没、アメリカの作家で、作家になる前は弁護士をしていた。作品には、“Randolph Mason”や“Uncle Abner”が活躍するシリーズがある。

訳者の毅漢は、張毅漢のことで、原籍は広東新会、1895年生まれ、1950年没、

13歳から小説を発表し始め、共作も含めて約130作の作品を残した。その大部分は翻訳小説という。

2

『Lord Winton's Adventure』のあらすじを紹介する。

イギリスの Winton 卿は大使館員としてアメリカに赴任することになった。出発前日の深夜、インドにいた頃知り合った宝石商 Mahadol が突然に訪ねてくる。Mahadol はお願いがあると言って、自分の身に起こった不思議な物語を始める。

船で立ち寄った Burma の Rangoon で、Cingalese の老水夫が船上に現われ、瀕死の白人が紳士に会いたがっていると言う。船上の人たちが誰も相手にしない中、Mahadol は興味を引かれ、上陸してその白人に会いに行くことにした。古い寺院の一角に、病気にかかり、瀕死のイギリス人がおり、その男は最後の力を振り絞って、Mahadol に語りかける。

その内容は以下のようなものであった。海軍で潜水艦を指揮していた時、船と衝突し、沈む前に何とか浮上した艦から、死に対する恐怖のために、一人だけ脱出した。艦自体はその脱出した扉からの浸水で沈んでしまった。彼は軍法会議で軍籍を剥奪され、身を隠そうとアメリカ行きの定期船に乗った。しかし、その船は氷山にぶつかり、沈没し始めた。彼は乗組員のように乗客の救出に当たっていたが、暗黒の船内、流れ込む海水、女性の悲鳴、傾く船体で、結局はまた死に対する恐怖のために甲板に逃げ出し、乗組員

と偽り女性優先の最後の救命ボートに漕ぎ手として乗り込んだ。その際、船内で何かを拾っていた。

救出された後、彼はアジアを転々とし、Rangoon で病に倒れた。彼が船内で拾ったものは、大変な価値を持つ宝石のネックレスで、彼はもとの所有者に返却したいと思った。死が迫ってきたので、その望みを Mahadol に託すことにし、所有者のアメリカ人女性の氏名 Mrs. Henry Randolph Norman と住所を伝えた。

Mahadol は、そのネックレスをとて手放しにくそうにしていたが、アメリカまでの船旅は耐えられないと言い、Winton 卿に預けた。

アメリカに渡った Winton 卿はその女性を訪ね、ネックレスを差し出し、入手の経緯を語った。彼女の第一声は、「Mahadol はなんて賢いのでしょうか！」だった。というのは、そのネックレスは彼女が Mahadol から購入したもので、アメリカへ送る際の関税は必要ないとのことであった。つまり、Mahadol は瀕死の白人の話を作って、Winton 卿の外交官特権を利用し、高価なネックレスを関税無しで届けさせたのだった。Winton 卿は怒ったが、いまさら真実を明かしても Winton 卿のためにもならないなどと彼女になだめられる。

タイトルに反して、Winton 卿の冒険は見られないが、Mahadol 作の奇妙な物語を軸に、Winton 卿の単純さと Mahadol の狡猾さが対照的に描かれたユーモア小説である。

Mahadol が語る大型客船の沈没は、海面下に隠れた冰山との衝突や不足する救命ボートなど、タイタニック号の沈没を彷彿させる。

### 3

中国語訳について述べる。

1917. 6 『Hearst's Magazine』掲載

1917.10 『The Strand Magazine』掲載

1918. 2 『小説月報』中国語訳掲載

1919年 『The Mystery at the Blue Villa』短篇集所収

ということで、中国語訳は雑誌掲載から直接翻訳されている。『Hearst's Magazine』を見ていないので、底本はどちらなのか不明であるが、本稿では両雑誌掲載の原作が同じものとして話を進める。

他にも訳されていた場合の参考にできると思うので、主な固有名詞の対照表を掲げる。

原文	中国語訳
Lord Winton	文吞 勳爵
Mahadol	馬赫杜而
Henry Randolph	蘭道而甫 亨利
Rangoon	龍干

翻訳については、物語には大きく影響していないが、省略がかなり多いことが言える。最初の Winton 卿の紹介部分、後の方の Mahadol が Winton 卿にネック

レスを預ける場面や Winton 卿が Mrs. Henry Randolph Norman に会う部分は大きく省略されている。他に、叙述の好みの違いであろうが、原作は Mahadol の語りの途中、小休止のような形で短い地の文をはさみ、じっくりと物語を進めている。それに対して、中国語訳はその短い地の文を省略することが多く、Mahadol の語りが延々と続く形になっている。

また、加筆もしばしば見られる。これは説明のための十字前後のものが多い。中でも多く加筆している個所の原文と中国語訳を一例挙げる。瀕死の人間のある種の強さについて述べる場面である。なお、原文の日本語訳は、浅野玄府訳『ウイントン卿の奇談』(『新青年』4-2掲載、博文館、1923年1月10日)を参照した。

“I have seen a Malay pirate carry a Swiss watch two hundred miles to a missionary in the Peninsula because a dying man sent him with it. If that man had been on his feet, in health, the Malay would have cut his throat and put the watch in his pocket.”  
(327頁左)

(「私は、マレーの海賊がスイス製の腕時計を200マイル離れた半島の宣教師に届けたのを見たことがあります、それは瀕死の男が行かせたからです。もしその男が元気で健康だったら、海賊は彼ののどを裂いて自分のポケットにその腕時計を入れていたでしょう。」)

“吾嘗親見一馬來海盜。受一死者囑。齎送一瑞士時表至三百里之遙。不敢辱命。若囑者爲無恙之人。此馬來海盜必以彈貫其腦。劫取時計。而其人瀕死。乃能令兇暴謹遵不違。故知將死之人。意志強偉無匹。”(5頁,句点は原文のまま、引用符は補った)

(「私は、あるマレーの海賊がある瀕死の者の頼みを受けて、スイス製の腕時計を300里離れた所へ届け、その依頼に背かなかったのをこの目で見たことがあります。もし頼んだ者が健康だったら、このマレーの海賊はきっと銃で頭を撃ち抜き、時計を奪ったでしょう。その人が瀕死だったので、凶暴な賊を従順にさせることができたのです。これで死に臨んでいる人の意志は何よりも強いことがわかります。」)

瀕死の人間の意志の強さというよりは、それを看取る側の、最期だから仕方なく頼まれてやろうという憐れみだと思うのだが、とにかく unnecessary な加筆に見える。

改訳(或いは誤訳)も見られる。瀕死の男が自身の経歴を述べる最初の場面である。

“The man had been in command of a training submarine in the English Navy. One day, off Portsmouth harbour, as the submarine was coming up, its tower was struck by the hull of a patrol boat. The submarine went down. They blew the

tanks, put on all the power of the engines, and finally got to the surface. But they could not keep on the surface. The submarine began immediately to sink. And suddenly, overcome by the fear of death, this man opened the hatch to the tower and jumped into the sea. The boat filled through the open door and went under.”

There was profound silence. The Oriental seemed to reflect; then he continued : -

“The Englishman was picked up, tried by a court martial, and dismissed from the Service....” (327 頁右) \*3

（「その男はイギリス海軍で訓練用の潜水艦を指揮していました。ある日、ポーツマス港外で、潜水艦が浮上した時、その上部が巡視船の船体と接触しました。潜水艦は沈んでいきました。乗組員はタンクを爆破し、エンジンの力を集中してやっと海面に出ました。しかし海面に浮上し続けることはできませんでした。潜水艦はすぐに沈み始めました。突然、その男は死の恐怖に負けて、上部に通じるふたを開き海へ飛び込みました。艦は開いたふたからの浸水で沈んでいったのです。」

深い沈黙があった。その東洋人は思案しているようだった、そして話を続けた。

「そのイギリス人は救い上げられ、

軍法会議にかけられ、軍務から解雇されました。...」)

“所告我者略如此。渠爲英國海軍潛行隊之艇長。一日。出海外。浮水面時。爲巡洋艦礮彈所中而沉。竭機力排水得浮。然終不支。復下沉。艇長懼死。啓瞭望臺之艙口。躍入海中求生。艇遂沉。艇長爲人撈救得生。逮解歸國。審得罪狀。褫其職。終生不得復爲官。”(6頁)

（「私に話したのは大体次のとおりです。彼はイギリス海軍の潜航艇の艇長でした。ある日、海外に出て、浮上した時、巡洋艦の砲撃に当たり沈み出しました。エンジンの力で排水し浮上しました。しかし結局は持ちこたえられず、再び沈み始めました。艇長は死ぬのを恐れ、上部のふたを開き、海中へ飛び込み助けを求めました。潜航艇は沈みました。艇長自身は助け上げられましたが、捕まって本国へ送り返されました。罪状を審査され、解雇され、一生復職することができなくなりました。」)

訓練中の事故を、中国語訳では戦闘中の撃沈にしてしまっている。交戦中ならば、降格はあっても、助かったのが一人なのだから、審判を受けることはないと思う。

もう一例挙げる。Mahadol が話を終えた場面である。

On the threshold the Oriental turned

back for an instant. His face in the dim light looked distorted as though powerful, invisible hands were pressing it together.

“You'll not forget the name?” he said.

And immediately he went down the steps. Lord Winton saw him disappear into the night, his huge body bulking gigantic as it blended with the darkness. (331頁左)

(玄関でその東洋人はちょっと振り返った。彼の顔はぼやとした明かりの中でまるで強くて目に見えない手で押されているかのようにゆがんで見えた。

「名前をお忘れではないでしょうね？」彼は言った。

そしてすぐに彼は玄関のステップを下りた。Winton 卿は彼が闇の中へ消えていくのを見ていた；彼の巨体が暗闇に混ざって更に大きさを増していた。)

時馬赫杜而復目勳爵。勳爵即應曰：“諾。”因出紙筆書彼美國婦人之姓名居址。馬赫杜而遂別。(9頁)

(そして馬赫杜而はまた卿を見た。卿はすぐに答えて：「わかった。」そこで書くものを取り出し、そのアメリカ婦人の名前と住所を記した。馬赫杜而は別れを告げた。)

原作で、話し終わってから全く口を開かなかった Mahadol が、去り際にたっ

た一言述べたのが上の台詞である。これはオチを盛り上げるためのちょっとした効果だと思う。中国語訳では、心の内はともかく表面上は最後まで Mahadol に圧倒された Winton 卿のようにしたかったのだろうか、改めなくてもいいように見える。言うまでもなく、情景描写は省略(無視)されている。なお、中国語訳はこの前の部分に大きな省略が見られる。

#### 4

Post の作家活動時期からみて、“Randolph Mason”や“Uncle Abner”の作品が先に翻訳されていてもおかしくない。しかし、恐らくは、前者は弁護士もので、法律及び裁判制度の違いから、また後者はキリスト教色が強いという理由から、両者とも敬遠されたのであろう。両者を含めて、これまでに Post の清末民初における中国語訳は知られておらず、言及も無かった。本稿が契機となって、Post 作品の中国語訳の掘り起こしが進むことを期待する。

なお、Post 作品の最初の日本語訳は、管見の及ぶ限りでは、村越啓一郎訳『金剛石』(『新趣味』18-1掲載,博文館,1923年1月1日 『The Diamond』\*4の訳)で、十日遅れてこの『ウイントン卿の奇談』である。Post も日本より一足先に中国に上陸していたのである。 罫

#### 【注】

1)《小説月報》は東豊書店の影印《小説月報 自創刊號起至廿二卷十二期止》(1979.10)を使用した。影印に



は奥付が無いので、発行年月日については、前掲『新編増補清末民初小説目録』を引用した。

- 2) 本稿では、『The Strand Magazine』 Vol.54-No.322(1917年10月)に掲載されたものを使用した。
- 3) 短篇集『The Mystery at the Blue Villa』(D. Appleton and Company, 1920年?)では、“submarine”をすべて“submersible”に作る。
- 4) 『The Diamond』については、雑誌初出不明、『Walker of the Secret Service』(D. Appleton and Company, 1924年未見、刊行年不記のA. L. Burt Company版で確認した)所収。

【参考文献・ホームページ(HP)】

陳玉堂編著《中国近現代人物名号大辞典》浙江古籍出版社, 1993年5月

郭浩帆「張毅漢 - 一位被遺忘的小説家」  
- 『清末小説』第26号, 2003年12月1日

Paula Kepos 編『Twentieth-Century Literary Criticism』Volume39, Gale Research Inc., 1991年

Hal May 編『Contemporary Authors』Volume110, Gale Research Company, 1984年

Scot Peacock(Project Editor)『Contemporary Authors』Volume202, Gale, 2003年

Donald A. Yates 執筆「POST, Melville Davisson」- Jay P. Pederson 編『St. James Guide to Crime and Mystery Writers(4th edition)』St. James Press, 1996年

戸川安宣「シャーロック・ホームズのライヴァルたち - アブナー伯父と生みの親ポスト」- M・D・ポスト著, 菊池光訳『アブナー伯父の事件簿』東京創元社, 1978年1月20日初版 / 2003年9月12日4版所収

William G. Contento 管理 HP「The Fiction Mags Index」

<http://www.philsp.com/homeville/FMI/0start.htm> (2008年12月8日確認)

N・M卿管理HP「ミステリー・推理小説データベース Aga-Search(アガサーチ)」

<http://www.aga-search.com/> (2008年12月8日確認)

Dennis Nowicki 管理HP「Studium Magazine」

<http://www.studiummag.com/> (2008年12月8日確認)

『明清小説研究』2008年第3期(総第89期) 2008発行月日不記

晚清《新聞報》与小説相關編年(1908-1911) ..... 陳大康

《官場現形記》連載及刊行考 ..... 王学鈞  
試論晚清小説《花月痕》の現代属性

..... 劉紅林

《鏡花縁》の現代意識 ..... 王同書、夏穎  
連篇鬼話の涵義 評《何典》對於傳統

価値の否定 ..... 王 韜

## 林譯小説《巴黎茶花女遺事》的訛傳

蘇 建新

在中國近現代翻譯史上，名家車載斗量，享譽海內外的有傅雷、梁實秋、朱生豪、林語堂、辜鴻銘……等多人，但所譯作品如福州林紓那樣以譯者之名冠之，則似乎找不出第二人。“林譯小説”實在太有名了！魯迅、冰心、郭沫若……這些現代文壇巨匠們，都是在林譯小説的直接啓迪影響下，才開始走上文學道路。

林紓翻譯的第一部外國小説是《巴黎茶花女遺事》，時間是1897年。林紓研究專家張俊才先生《林紓評傳》高度讚揚《巴黎茶花女遺事》的翻譯，使林紓“這位目不識‘蟹行文字’的落第舉人，也奇迹般躋身譯界，正式走上了翻譯西洋文學作品的道路”<sup>\*1</sup>。

五四至今，人們評價林紓的歷史功績，幾乎異口同聲地首先把贊成票投給他的翻譯。當代研究近代文學的專家、山東大學教授郭延禮先生三卷集的《中國近代文學發展史》也是在談近代翻譯的一章中介紹林紓的，林譯小説以外的創作僅附帶了一筆。

對林譯小説，嚴復曾有著名的評論：

“可憐一卷《茶花女》，斷盡支那蕩子腸！”

按理說，《巴黎茶花女遺事》這部林紓翻譯最早也是最成功的小説，對於那些充分肯定他的翻譯成就的有關學者來講，應該是比較熟悉，不會弄錯的吧。

其實不然，筆者發現在不少介紹林譯小説的著述中都有和《巴黎茶花女遺事》相左的地方，一不小心就張冠李戴地將不屬於林譯的內容塞進了他的作品內。

林譯《巴黎茶花女遺事》是怎樣結尾的？翻開孔慶茂先生《林紓傳》（近代文化巨人叢書，團結出版社），第50頁用6行文字介紹小説情節，寫道：

由於精神的折磨、感情的打擊和身體的虛弱，茶花女臥床不起。但她內心仍無時無刻不在思念著亞芒，臨死前，她不甘心帶著兩人永遠的遺憾而死去，她請求亞芒的父親，讓他們再見最後的一面。亞芒的父親被茶花女的可憐所感動，寫信給兒子，亞芒得知消息，恍然大悟，立刻趕回巴黎，為自己的無禮傷害向茶花女懺悔，茶花女述說了整個事情的過程和真相，傾吐了對他的愛情。她感到幸福和滿足，依偎在亞芒的懷抱裏恬靜地死去。

下面緊接著評論說：“這是一個令人肝腸寸斷的故事。”這兒讓人好奇怪，馬克這樣“感到幸福”、“恬靜地死去”，怎麼“令人肝腸寸斷”呢？

1961年第10期《世界文學》上有一篇阿英的《關於〈巴黎茶花女遺事〉》。文中全文引用了吳東園《法京巴黎茶花女馬克格尼爾行》：

回心突遇同心結，抵死猶求一面緣。  
小玉自知病不起，紅顏命薄乃如此。  
綠野難尋匏止坪，碧窗賴有于舒裏(謂  
女伴)。

落落寞寞恩談街，燕侶鶯儔無複來。  
絲兒氣力絲兒命，一夜呼郎五百回。  
絳縣赤城天咫尺，脂殘粉剩空陳迹。  
遊客方尋海外香，美人已化山頭石。  
書卷飄零返寓公，夕陽回首債台空。  
至今青塚埋香骨，一片山茶濕冷紅。\*2

吳的長詩被阿英讚譽為“簡直是一篇《馬克格尼爾本事詩》”。對照本事詩，我們發現《林紓傳》的敘述與此有明顯出入。亞芒到底在茶花女瀕死前有沒有“一面緣”呢？

還好有別的資料可以幫助找出究竟。內蒙人民出版社《中國近代名家名作寶庫》第九輯《林紓》收錄了《巴黎茶花女遺事》，翻閱到卷終，發現敘述的是護士于舒裏獨自為馬克送終。第91頁“余”(于舒裏)敘述：“聞聞一二次呼亞猛字，已而無力，遂死。死時猶有餘淚也。……且此婦人之死，均余搓其目，著其衣冠，扶之入柩，均我一人之力也。”

“一夜呼郎五百回”而終究與郎沒有“一面緣”，馬克這樣離去，才會符合《林紓傳》做出的“這是一個令人肝腸寸斷的故事”的評語。否則像它說的“她感到幸福和滿足，依偎在亞芒的懷抱裏恬靜地死去”，何來“令人肝腸寸斷”的閱讀效果？

像這樣介紹林譯《巴黎茶花女遺事》而出錯的當然不止此書，這裏就不一一列

舉了。令人欣慰的是，福建教育出版社的《林紓》在此小說結尾的敘述處則相對比較客觀、準確，與阿英讚譽的《馬克格尼爾本事詩》一致：

亞猛不明真相，誤認馬克負心，多次尋機報復。馬克因苦悶而臥病不起。她頻呼亞猛的名字，在痛苦中死去。當亞猛明白過來時，她已含恨離開人世，只留下幾頁碎心的日記……\*3

筆者認為這種錯謬是引者在轉述二手材料時沒有認真參閱原作，以訛傳訛的結果。那麼傳訛的源頭在哪里呢？

張俊才先生輯《林紓研究資料》中有一篇孔立的《風行一時的“林譯小說”》，筆者讀後大吃一驚，發現文中敘述茶花女的結局，就是“恬靜地死在愛人的懷中”：

茶花女在病中仍然時刻思念著亞猛，她一直叨念著亞猛的名字，希望在臨死以前能夠再見他一面。亞猛的父親被茶花女的真情所感動，終於寫信告訴亞猛。亞猛立刻趕回巴黎，向茶花女懺悔自己的過錯。這時，茶花女感到十分幸福和滿足，她向亞猛訴說了一貫的深情，恬靜地死在愛人的懷中。\*4

孔文出現的時間較早，在社會上產生了一定影響。可見，後出的《林紓傳》等著作在介紹《巴黎茶花女遺事》方面產生訛誤，根子都可以追究到它那裏去的。

該案雖屬小事，但一錯再錯，相沿成

习，也頗可說明学界在林紓研究上认真求实的态度不足的现状。过去《新青年》对林译小说不事调查而抹煞的冤情已被樽本照雄先生一一洗雪，而类似《巴黎茶花女遺事》的詛謬和至今對林紓的嚴重誤讀，則期待更多学者本着严肃的科学态度來加以更正。 罌

【注】

- 1) 張俊才：『林紓評傳』，中華書局2007年，60頁。
- 2) 陳錦谷編輯《林紓研究資料選編》上冊，福建省文史研究館2008年，167頁。
- 3) 曾憲輝《林紓》，福建教育出版社1993年，62頁。
- 4) 薛綏之、張俊才先生編《林紓研究資料》，福建人民出版社1982年，281頁。

梅家玲主編

『文化啓蒙与知識生産：跨領域的視野』  
台湾・麦田出版、城邦文化事業股份有限公司2006.8.15

流動的風景与凝視的歷史 晚清北京画報中的女学 .....陳平原  
 教育，還是小説？ 包天笑与清末民初的教育小説 .....梅家玲  
 知識消費、教化娛樂与微物崇拜 論《小説月報》与王蘊章的雜誌編輯事業 .....胡曉真  
 通俗文学的文化啓蒙与文化承伝...范伯群

晚清小说作者扫描（拾捌）

武 禧

（零八五）

忧患余生

小说创作：《邻女语》

连梦青（？-1914之后）：浙江杭州人（一说江苏人）。名文澄、文徵，字梦青、孟青、梦惺。笔名忧患余生。生于湖南，与沈荇、龚超交往。曾经参加唐才常主持的自立会。后任外部部曹。1903年因透露《中俄秘约》，使之公诸于众，而受沈荇案牵连逃往上海。后为《绣像小说》撰稿，因稿费不足为生，刘鹗以笔名洪都百炼生赠其《老残游记》一书手稿发表。1903年又主持上海《世界繁华报》鼓吹排满。曾为李伯元的《官场现形记》撰写序言。1908年主笔《南方报》。1909年受同盟会派遣，曾到哈尔滨任《远东报》主笔三年。民国后熊希龄任内阁总理，连被聘为哈尔滨交涉员。后回京，历任院部顾问、咨议等。1914年，病卒于北京。著有《哀滇泪》、《商界第一伟人》（《戈布登轶事》）、《红茄花》、《邻女语》等。

（零八六）

## 蘧园

小说创作：《负曝闲谈》

欧阳巨源（1883-1907）：江苏苏州人。名淦，别署惜秋生、茂苑、蘧园、巨元、矩源、钜源等。1898年16岁中秀才。擅长文章词赋，下笔敏捷。入学时报吴县籍，吴县人攻击他冒籍，经人调停才得以缓解。1899年以惜秋生笔名投稿《游戏报》，此后长有文章在报上发表。1899年6月到上海，协助李伯元办报，任《游戏报》的编撰。1901年春，作为李伯元最得力的副手参与创办并编辑《世界繁华报》。1903年春参与创办和编辑《绣像小说》。并开始创作小说和戏剧，对维新运动持积极的态度。1906年接办《世界繁华报》等。后因产权问题曾与李伯元的家属产生过一些纠纷，最后协商解决，《世界繁华报》归欧阳巨源所有，李氏家属得到一些经济补偿。李伯元尚未写完的小说如《官场现形记》等，最后也由他续完。由于长期混迹风月场中，生活糜烂，最后因花柳病于1907年逝世。其创作有《负曝闲谈》、《维新梦传奇》等。曾为《官场现形记》《糊涂世界》等名著作序。又李伯元、吴趼人等作《官场现形记》《海天鸿雪记》《活地狱》等名著中常有其代笔情形。与庞树柏合编有《玉钩痕传奇》。

(零八七)

玉瑟斋主人

小说创作：《回天绮谈》

麦孟华（1875-1915）：广东顺德吉佑乡关村人。字孺博、汝博，号驾孟、蟠庵。笔名曼倩、曼殊、曼殊庵主人、先优子、佩弦生、玉瑟斋主人。1888年入广州学海

堂。1891年入万木草堂，为康有为的忠实弟子并为康婿。1893年与康有为同科中举。1895年春与康有为、梁启超一起进京应试。时常与梁“规划救国政略，并助南海先生奔走国事”。受康有为嘱咐，鼓动在京各省举人上折拒和，参加“公车上书”。同年夏在康有为创办的《万国公报》任撰述和编辑。1897年与梁启超、汪康年等创不缠足会于上海，任董事，并为《时务报》等撰写文章，主张“尊君权，抑民权”。1898年春与梁启超等联合两广、云贵、川陕、浙江等省举人上书，反对租让旅大给俄国。同年3月参加康有为等创立的保国会。戊戌政变后，逃亡日本，协助梁启超创办《清议报》。次年代梁主持该报，撰写320余篇宣扬保皇的文章，提倡学习日本维新，增强国力以救亡。1899年梁启超奉康有为命赴檀香山进行保皇活动。曾代理东京高等大同学校校长。义和团运动兴起时，诬蔑起义群众为乱民，支持“东南互保”，号召南方督抚镇压义和团，起兵勤王，实行南北分治，要求各国合兵迎光绪复位。《辛丑条约》签订后，又为国权尽失、利源尽夺、无复和平、中国政府充当列强傀儡和奴隶而感到忧愤不已。1902年任《新民丛报》撰述，1907年在东京任政闻社常务员。1913年在康有为创办的《不忍》杂志任编辑。后充任冯国璋幕僚，“相与谋倒袁”。1915年2月25日死于上海。麦生平喜爱吟咏，词章绵丽沉郁，一生奔走国事，不以诗文鸣世，但其才华却深受学界的推崇。陈三立称其“才情跨一世”，伍宪子誉之“负海涵山绝世才”梁超更谓以“君才我十倍”。著有《蛻庵诗词》三卷，后为友人收入《粤两生集》。小说

著作有《回天绮谈》《血海花传奇》。

(零八八)

洪都百炼生

小说创作：《老残游记》

刘鹗（1857-1909）：江苏镇江人。名震远、鹗、云抟、梦鹏、孟鹏。小名鹏鹏。又名云臣、箕湍、公约、铁云、百一、百壹、蝶云、蜨。笔名洪都百炼生、鸿都百炼生、蝶隐。自署再不死人、蝶翁、老铁、刘二、铁翁、抱残、老残、如来最小弟子、空同最小弟子、刘武僖王后裔、百炼老铁、抱残守缺斋主人、抱残守缺人、天下第一江山渔樵、耕士。绰号刘二乱子。斋名半瓦镫斋、五十瓦镫斋、百瓦镫斋、二百瓦镫斋、抱残守缺斋、抱残守缺之斋、得秋气斋。刘鹗生平可以分为六个时期，一、1857年—1876年，刘鹗出生到二十岁的青少年时代，为第一时期。二、1877年—1884年，刘鹗二十岁到二十八岁为第二时期，为其一生事业的准备时期。三、1885年—1894年，刘鹗二十九岁到三十九岁，为第三时期，为其事业初成的时期。四、1895年—1901年，即刘鹗三十九岁至四十五岁，为第四时期。为其事业上屡战屡败、屡败屡战时期。五、1902年—1907年，即刘鹗四十五岁至五十岁，为第五时期。为其学术与艺术上取得骄人业绩的时期。六、1908年—1909年，刘鹗走完了自己坎坷的人生之路。刘鹗是一个颇有争议的人物，百年来对刘鹗的评价有数十种之多（对此可参见2007年12月吉林文史出版的、刘德隆整理的《刘鹗集·前言》）。最新的评价有二：一、刘鹗是中国近代知识者中自觉完成“转变”的一个代表人物。他在中国近

代社会转折期跳出了千年来中国士子的老路，独立特行，自主自立地凭借自己的理想，从事有益于社会民生、同时又契合自己意愿、符合自己趣味的事情。（谷梁《特立独行的现代知识者》。刊2008年8月31日《文汇报》）二、多学多艺的刘鹗是一位积极进取、勇于实践的行动者。他怀抱救国理想，无畏流言，更不计个人利害，在滔滔末世洪流中，以他独特的眼光与行动，进行心目中有用的实业计划。（黄锦珠《重新认识清末狂士刘鹗》。台湾《文讯》杂志2008年9月号）刘鹗著作甚丰，撰写小说《老残游记》并自撰评语，为小说《邻女语》撰写评语。存有诗词手稿《芬陀利室存稿》。其它著作有《历代黄河变迁图考》、《三省黄河图说》、《治河五说》、《要药分剂补正》、《温病条辨歌括》、《弧角三术》、《勾股天元草》、《金石考录》。刻印《十一弦馆琴谱》。拓印《铁云藏龟》《铁云藏陶》《铁云藏货》《铁云藏印》等。 罍

中国近代文学研究『留得』第26期(2008.11)は、「“中国近代文学の転型与伝統”学術研討会暨中国近代文学学会第十四届年会」特集です。

#### 清末小説から

夏 敏 《不如帰》在中国的紹介『語文学刊（高教版）』2006年第1期（総第195期） 2006.1.25

- 森岡優紀 日本政治小説の翻訳と清末小説形式に関する考察 啓蒙の二つのかたち 『立命館経済』第56巻第3号2007.9.20
- 郭 楊 林訳小説口訳者小考 湖南師範大学 『中国文学研究』2008年第4期(総第91期)
- 何 紹斌 《百年一覚》 訳者想像性叛逆的範本 『越界与想像 晚清新教伝教士訳介史論』上海三聯書店2008.4
- 杜 新艷 晚清報刊諷諧文学与諧趣文化潮流 『中国現代文学研究叢刊』2008年第5期(総第124期) 2008.9.15
- 朱 瑜 林紓の翻訳和時代 『中国現代文学研究叢刊』2008年第5期(総第124期) 2008.9.15
- 韓 一字 『清末民初漢訳法国文学研究(1897-1916)』北京・中国社会科学出版社2008.6
- 孟 華 (『清末民初漢訳法国文学研究(1897-1916)』)序 韓一字 『清末民初漢訳法国文学研究(1897-1916)』北京・中国社会科学出版社2008.6
- 劉 鉄群 『現代都市未成型時期的市民文学 《礼拝六》雑誌研究』北京・中国社会科学出版社2008.8
- 楽 黛雲 (『比較文学研究』)導論 楽黛雲編 『比較文学研究』武漢・湖北教育出版社2008.8 20世紀中国學術文存
- 陳 平原 『左図右史与西学東漸 晚清画報研究』三聯書店(香港)有限公司2008.10
- 劉徳隆、朱禧編 『也無風雨也無晴 滄榕書札』私家版 刊年不記(2008.11)
- 劉永文編 『晚清小説目録』上海世紀出版股份有限公司、上海古籍出版社2008.11 光華文史文献研究叢書
- 梁 淑安 《<中国近代伝奇雜劇経眼録>校補》正誤 『文学遺産』2008年第6期 2008.11.15
- 瀬戸 宏 王国維《莎士比伝》を読む 『中国文芸研究会会報』第325号 2008.11.30
- 陸 建徳 再説“荊生”,兼及運動之術 『南方周末』2008.12.4電字版
- 劉増杰、孫先科主編 『中国近現代文学転捩点研究』上海文藝出版社2008.9
- 關於文学転捩点涵義的辨析 .....吳福輝  
梁啓超与文学界革命 .....関愛和  
近代文学觀念理論基礎的變動.....王 飜  
嘉道之際:中国近代文学の開端...胡全章  
論中国現代文学史起点的“向前移”問題 .....范伯群  
新南社:五四前後文学転型的青果 .....孫之梅

【清末小説研究会の本】

樽本照雄著

# 林紓研究論集

A5判 上製 箱入り 409頁 限定150部 定価：8,400円

林紓(りんじょ)が批判されるのは、主としてふたつの側面からです。彼の外国小説翻訳および五四直前の行動になります。

林訳小説が当時の中国文芸界に与えた大きな影響について高い評価を与える研究者はいます。しかし、同時に翻訳の欠点をあげるのが常です。最大のものは、外国の戯曲を小説にかえて翻訳したことでした。戯曲と小説の区別がつかない、と非難が集中しています。また、1919年において武力を背景に文学革命派を攻撃したというのも理由のひとつです。

現在にいたるまで林紓批判は止むことがありません。しかし、その根拠とされているそれらの事実は存在しないのです。証拠もないのに濡れ衣を着せつづける熱心な研究者が、いまだに出現しています。過去の研究をふりかえれば、その根は相当に深いといわざるをえません。本書は『林紓冤罪事件簿』につづく第2論文集です。

## 【内容目次】

阿英による林紓冤罪事件	『吟辺燕語』	林紓落魄伝説	
序をめぐって		陳独秀の北京大学罷免	『林紓冤罪事件簿』補遺
林訳「ハムレット」	『吟辺燕語』から	1 北京大学をめぐるウワサが事実になるとき / 2 北京大学改組と陳独秀の罷免 / 3 林紓の皮肉	
ラム版『シェイクスピア物語』最初の漢訳	と林訳 「十二夜」を中心に	周作人が魯迅を回想して林紓に言及する	
林訳シェイクスピア	クイラー=クーチ	日本語訳注釈について	
版「ジュリアス・シーザー」		『林紓冤罪事件簿』ができるまで	あ
林訳チョーサー		るいは発想と研究方法について	
林訳ユゴー			
中国現代文学史における林紓の位置			

清末小説研究会

<http://www.biwa.ne.jp/~tarumoto>